

私ずっとここにいて良いですか？

～新しい住まいが私の住まいになる瞬間(とき)～

神奈川県横浜市

介護付き有料老人ホームすいとぴ一金沢八景

職員 長内 真名美

1 はじめに

それぞれ、色々な思いで施設での生活する事を決め、入居されていると思う。

その中で「終の棲家」として選んでいただいた入居者にここに来て良かった、とっていただけるよう、努めていかななくてはならない。

「終の棲家」という意味を深く考え、すいとぴ一金沢八景の終の棲家とはどういうものなのか、この事例をもとに改めてチームで考えたいと思う。

2 事例

W様 77歳 女性 要介護1

研究期間 入居時(5月2日)～9月30日

厚木市で生まれ、穏やかな性格で社交的で活発であり、今までこれといった大病は無い。

平成24年6月に長谷川式スケールを行い11/30点で短期記憶の低下もみられMRI検査と併せて、脳血管性とアルツハイマー型の認知症と診断される。

入居前の様子は、ご主人と二人暮らしをされていたがご主人が1年前に他界後は一人暮らしとなった。

便失禁されると、どうかしようとして部屋中便汚染の状態になったり、食事も召し上がらないため、ご家族が代わる代わる毎日来られ、お世話をすることになった。

ご家族が10時頃氏の家に来られ、それから起きて朝食・昼食を召し上がっていた。ご家族が来るまではずっと起きられず、ずっと寝ていた。

夕食は作り置きしても召し上がらないことがあるので16時頃の帰宅するまでに夕食を召し上がっていた。

家族のいない間の行動は分からず、家族の介護も限界があり、入居に至った。

またご家族の心境としては施設に入って良かったのだろうか。という複雑な心境で入居になった。ご本人に対して申し訳ないという気持ちが強くみられていた。

入居後の様子

ご家族と共に施設に来られたが、ここに泊まる事が理解できず、強い帰宅願望がみられる。

また今までの生活でベッドで休んだことは無く、ここでは眠れないとの発言もあったため、急遽ベッドから、布団に変え、休まれた。

その後から、離床拒否、介護拒否が続き、食事も居室に持って行くがほとんど召し上がらず、声掛け、介助行うも半分も摂取が出来なかった。

また声掛けするも、仮面様相貌もみられ、無視することが多かった。排泄もご自分で行かれるが、排便の処理が出来ず、便失禁も多く、居室内は便汚染が頻回にみられた。

このような状態の為、施設の生活に慣れていただくため、以下の課題をあげた。

- ① 施設の生活になれていただき、穏やかに過ぎて頂く。
- ② 生活する上で楽しみを作る。

① についての考察

入居時は本人がわからないまま施設に来られ、理解できないまま入居されたので、混乱状態になってしまったと考える。

その為、帰宅願望、介護拒否、徘徊などのBPSDの症状が現れた。

この対策としては、まずコミュニケーションを図り、ここは安心なところです。と常に訴えかけ、できるだけ多く関わり、信頼関係を徐々に構築していく。

もし拒否などがあった場合は無理に行わず、本人のペースに合わせて介助を行った。

また歌がお好きなので、落ち着いた雰囲気、ゆったりとした生活をして頂く為に、居室にラジカセを設置し常に、童謡やクラシックの音楽を流した。

さらに、以前の生活はこたつと布団という生活をされていたので、こたつ、布団を設置し以前生活をされていた環境に近づけるなどの対策を取った。するとBPSDの症状も少し軽減されてきた。

身体的負担を軽減するため、布団から、ベッドの導入を試みた。家族の協力もあって、拒否もなくベッドで休まれた。本人からも、このベッドいいわね。と笑顔も見られた。

② についての考察

生活する上で楽しみを作ることも重要なので本人の好きな事を伺い、検討した。

本人からよく訴えがあるのは、「何か美味しいものが食べたい」という訴えが多く聞かれた。

その対策として、本人の嗜好品を伺い、食べたい物があれば即座にスタッフが購入し、フルーツ、ヨーグルト、サンドウィッチを召し上がっていただいた。

朝食にはスタッフが手作りでサンドウィッチやフルーツヨーグルトを作ったりして、食事をされた。こうする事で食事の意欲が増し、食事と併せて提供すると、除々ではあるが食事量が増えてきた。

この時の本人の様子は、とても美味しそうに召し上がり、笑顔も多くみられてきた。時にはもっと食べたいという訴えも聞かれるようになった。

以前は刺繍などをされていたので、今後スタッフと一緒に刺繍製作をしていく予定。

7月1日脳血管性とアルツハイマー型の認知症と診断されたためアリセプト服薬開始。

7月15日服用してから暫くは副作用などない為、3mg→5mgに変更。

7月20日抑肝散も併せて服用したが、食事の摂取不良見られ服用中止した。

7月23日それから他室に入ったり、日によって表情硬くなったりと不穏な為、ジブレキサ服用開始。

日々症状が変化する中で、常に観察を行い、内服薬の調整も行った。服用前も出来るだけ多く関わり、食事が進まない時は随時好きなものを提供し召し上がっていただいた。

また歌がお好きなので、こちらから歌い始めると、本人も一緒に歌を歌い、笑顔も見られ、日によって状態が変わるが、離床して頂き、リビングでお食事を取られ、介助、声掛けもなく自分から摂取出来るようになった。

さらにコンサートなどの色々なレクにも参加され笑顔の回数が増えてきた。

出来るだけ多く関わりレクなど参加された時は常にスタッフが寄り添い、安心出来る様に対応した。

また他のご入居者がピアノの伴奏をして頂いたので、W様と一緒に歌を歌い他者との交流も図り、とても満足そうな様子がみられた。

ご家族の方は最初は気持ちの整理が出来ず、会いに行けなかったが、普段の様子を伝え、密に連絡を取り、徐々に気持ちの整理ができ、少しずつ会いにいけるようになってきた。

今後は外食レク、外出レクなどの参加も試みようとする取り組みを始めている。

3 考察

この事例では終の棲家として、穏やかに、自分らしく生活ができるか、支援をしていかなければいけないと考える。その為に以前の生活環境、パーソナリティを理解しなければ一人一人により良い支援が出来ないと思う。

またチームでの支援だけでなく、他の職種間の連携の他に、ご家族が終の棲家として理解していただくことも重要ではないかと考える。

ご本人、ご家族が終の棲家として決断をしていただく為にも、住みやすく、安心、安全な施設作りに努めていかななくてはいけないと思う。

スタッフが積極的にコミュニケーションを取り、心ある介護を行っていけば、時間はかかるかもしれないが、ご本人が心を開いて寄り添えるような関係を築けると考える。

4 おわりに

当施設の社訓である「真心」「分かち合う喜び」「地域貢献」「チャレンジ」を各自が大切にし全ての入居者様が棲家として喜んで生活していただく為に四季の行事の他にも菓子作り、茶道の会、模擬喫茶店、落語の会、一泊旅行、横浜港クルージングなど今後も取り組んでいきます。何よりも豊かな心でお客様をサポートできるように外部研修参加も推進しています。

